坊の海に魅せられて
～父娘で活かす磯根資源～

久志漁業協同組合　下向みどり

1　地域の概況

坊津は，薩摩半島西端部にある南さつま市南部に位置し，東シナ海に面しておよそ 52km のリアス式海岸が続き，海に山々が迫る地形になっています（図 1）。また，江戸時代まで海外交通の要所で，貿易港として栄えていました。

坊津地区には私の所属する久志漁協の他に，坊泊漁協，秋目漁協があり，古くから遠洋カツオ一本釣や定置網・ブリ飼付等，種々の漁業によって繁栄した伝統的な漁村です。

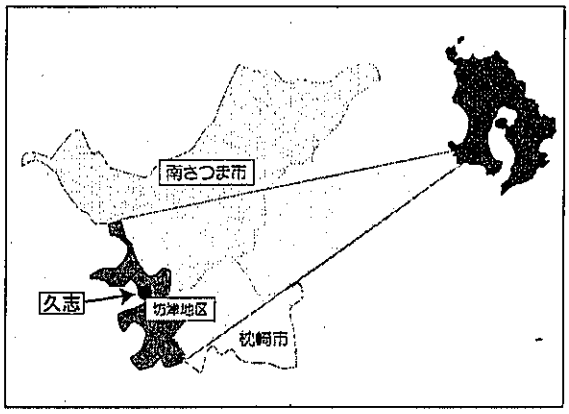

図１　南さつま市坊津の位置

私は，この漁村で育ち，現在父と漁業をしています。その経緯と現状についてお話ししたいと思います。

2　漁業の概要

私の所属する久志漁協では，定置網，建網，一本釣，曳縄等の漁業が営まれており，平成 16 年度は組合員 133 名（正組合員 30 名），水揚げ数量 62.5 トン，水揚げが多いのは定置網で，全水揚げの３割近くを占めます。

3　就業までの経緯

私は小さい頃は大阪に住んでいましたが，小学校３年生から父の実家である坊津に移り住みました。小学校では坊津の伝統行事である棒踊り，かま踊り等を通じ，坊津の暮らしになじんでいきました。

祖父は漁師で，父も私が中学生の頃から漁業を始めました。その頃から私も漁船に乗せてもらい，素潜りをして海の中を見たりしました。

高校は県立鹿児島水産高校に進学しました。１年生ではロープワーク等を，２年生になると種苗生産やボンベを背負った潜水を行い，海と海に生きる生物のすばらしさを体感することができました。

就職は，水族館の採用試験を受けましたが，残念ながら採用はかないませんでした。その後，枕崎で海とは関係のない仕事に就き，５年ほど働きましたが，仕事が合わなかったようで，辞めてしまいました。

再度就職先を探していたとき，父から「漁を一緒にしないか」と声をかけられ，休みの日に船上の手伝いをしていたこともあり，「それもいいかな」と父の手伝いという形で漁業に携わることになりました。

4　就業後の経過

私と父は，0.6 トンの船外機で，素潜りによる潜水漁業と，イセエビ建網を組み合わせて操業しています。

建網と潜りを行うときは，朝８時頃出港し，まず漁場に建ててある建網２反（１反 25 m）をあげていきます。父が操船し，私が網を上げながら漁獲物をはずし，父の指示で再度網を漁場へ入れます。昼前にいったん帰港し，建網の漁獲物を処理した後に素潜りのポイントへ向かい，午後１～２時頃に帰港します（図２）。

５～８月のイセエビ禁漁期と行使規則で定められた月夜の５日間の休漁日は，素潜り漁だけを干潮時を中心に３～４時間おこないます。

素潜りは，父と相談して毎日少しづつ漁場を変えます。父と私でそれぞれ潜り，タカジ，クロミナ，アナゴなどの貝類や，注文に応じて釣り餌用のガンガゼを取ります。出荷する貝のうち，重量はクロミナ５割，アナゴ４割，タカジ１割程度です。いずれもゆでて食べるとおいしいですが，クロミナは吸い物に利用されることも多いようです。ガンガゼは年中出荷していますが，イシダイ釣りが盛んな，10 ～ 11 月の出荷が多くなっています。

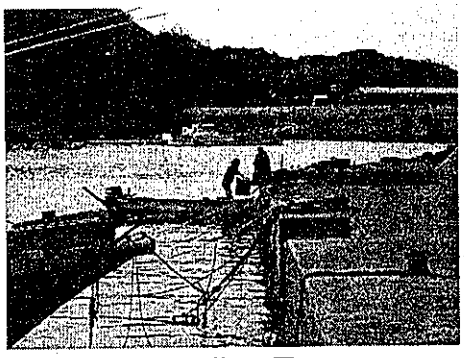

図２　　帰港風景

漁獲物は，翌朝漁協の委託を受けた集荷業者に枕崎市漁協市場へ持っていってもらいます。素潜りでの１日の漁獲は，合わせて 10kg 程度です。

5　父と漁業に携わって

漁業を始めて４年ほどになりますが，漁業をしていて私が一番楽しいのは，海中のいろいろな生物やその生態が見られることです。最初は，生物を見るのに夢中になって採ることを忘れてしまい，よく怒られました。

素潜り漁を始めた頃と比べると，息の長さが倍くらいになり，それにつれてたくさん漁獲できるようになってきました。初めは，父の後をついて潜っていたこともあり，父の半分の量も採れなかったのが，最近では父と五分五分か，上回るときもあり，上達していると実感します。「やっていて良かった，またがんばろう」という気持ちになります。まだ父からは「動きに無駄がある」と言われていますが，もっと素潜り漁がうまくなり，いつかは父を追い越したいと思っています。

久志漁協では，夏だけ素潜り漁をする人はいますが，周年潜るのは父と私だけです。夏は夏バテするし，冬は寒いのがきついですが，まだやめようと思ったことはありません。

6　現在と今後の取り組み

漁獲対象の種については，特によく観察することで，資源保護につながりそうなことがあれば積極的に実践しています。以下数種について紹介します。

①タカジについて

タカジと呼んでいるのは，ギンタカハマが主だと思います。（図３）タカジの生息場所は主に水深１～３ｍの瀬で，大きいものほど深いところにいます。冬には大きいものは水深５ｍ程度まで移動し，特に大きいものは底の方の穴の中に入っており，暖かくなると浅場にあがります。私の採捕する貝の中では，水温により移動するのはタカジだけのようです。

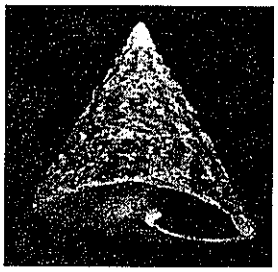

図3　タカジ（ギンタカハマ）

また，６～８月に径が４，５ cm 以上の貝で２個体ずつペアになっているものが見られます。同じ時期に，貝殻の平らな部分のうち，軟体部を伸ばす場所に赤紫の卵らしきものがついていることもあります。これらは以前は夏場だけ見られましたが，最近は水温変化の影響か，もっと遅くにもこの状態を見るようになりました。タカジの資源量は年々減少していて，型も小さくなってきているようです。

②クロミナについて

クロミナと呼んでいるのは，クマノコガイ（図４），ヒメクボガイ（図５），オオコシダカガンガラ（図６）の３種だと思います。

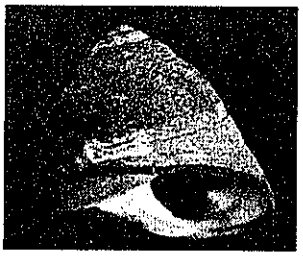

図4　クマノコガイ

水深 30 ～ 50cm の一番浅場にいるのはクマノコガイで，大型の貝は波では動かない大きい岩に付いています。

水深 50cm ～１ｍには大型のヒメクボガイが，それより深いところには中型がいて，小型は水深 1.5 ｍ位にいます。ヒメクボガイは，波でも動くような径 30 ～ 60cm くらいの大きさの石にも付いています。

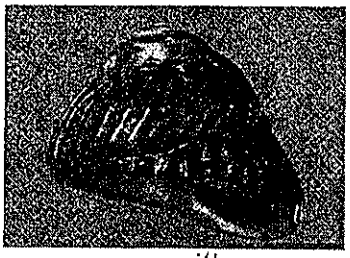

図5　ヒメクボガイ

オオコシダカガンガラは，中型のヒメクボガイと同じ位の水深にいますが，あまり採れません。

クロミナは潮の満ち干で移動し，同じ時間帯でも次の日はいなかったりします。

ヒメクボガイ，クマノコガイは，６～８月に集団になっています。これらはタカジと違い，大きいのが中心に１個いて，そのまわりにやや小さい５～６個がかたまっています。私は中央にいるのがオスかメスで，周りに集まっているのが異性で，これが産卵行動なのではと考えています。その後，８，９月には１ cm に満たないヒメクボガイや，オオコシダカガンガラが見られるようになります。

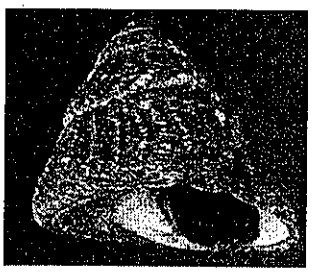

図6　オオコシダカガンガラ

９月以降になると，３ cm 以上の大きな個体が死んでいるのを見かけるようになり，産卵後死んでしまうのではないかと思っています。

漁獲するときはなるべく重量が重いヒメクボガイを狙いますが，ヒメクボガイは固まって生息しているので，それのみを狙うと取り尽くしてしまう恐れがあると思い，他のクロミナを採って調整しています。

③アナゴについて

アナゴ（図７）はごく浅いところから，水深 1.5 m位まで生息し，小さいときはほとんど穴に入っています。潮が満ちあがる時に這っているので，満ちあがる時を見計らって取った方が傷がつきません。

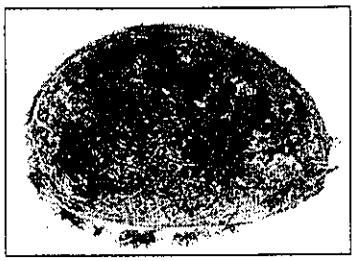

図7　アナゴ

アナゴについて不思議なのは，３～４ cm までの小型貝では，殻では判別できませんが，貝殻からはみ出した軟体部がピンクのものと，茶色のものが半々くらいいるということです。それより大きくなると軟体部が茶色のものしか見あたりません。住んでいるところも全く同じで，同じ種類なのかどうか，不思議に思っています。

①②③の生息域をまとめると図８のようになります。

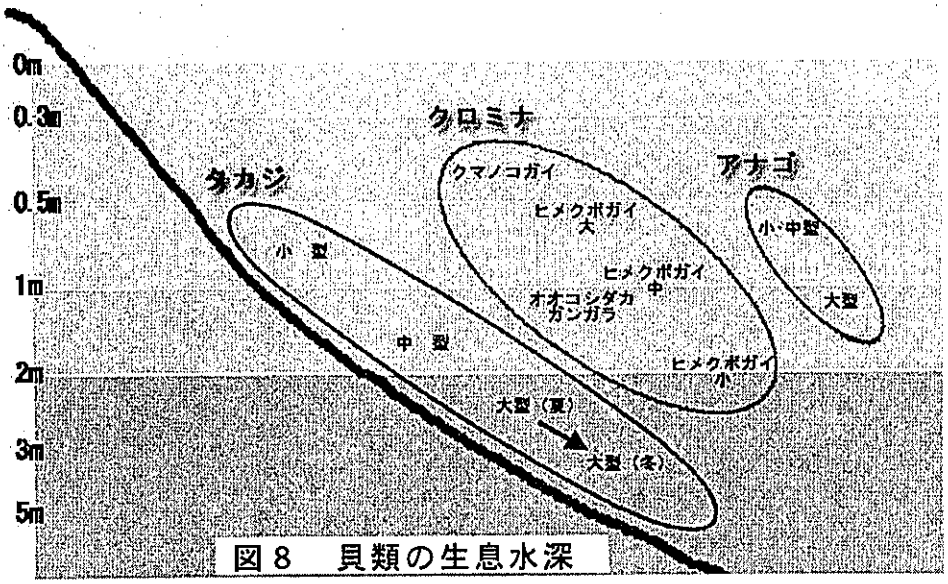

図８　貝類の生息水深

④ガンガゼについて

ガンガゼ（図９）の生息水深は夏は２～５ｍ位で，冬は３～６ｍ位に移動します。岩だけでなく，サンゴの間や瀬にも生息しています。漁獲サイズとして殻の直径が６ cm 前後のものを採りますが，船上でも選別します。

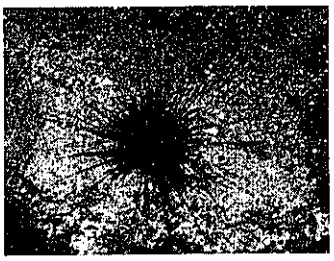

図9　ガンガゼ

ガンガゼは，貝を採った後に，一度に２～３日分を採りおき，活かしで出荷します。棘を根元から折ると死にやすいので，ステンの引っかけで岩からは

がし，カゴに入れて活かします。

ガンガゼを活かしておくと，高水温の時に死んでしまったりすることがあるので，水温何度くらいで，どのくらいの密度で活かせばよいかを今後調べていきたいと思っています。

ガンガゼの資源量は昔とあまり変わらないようです。

⑤その他

トコブシ，アワビは一昨年までは見られましたが，昨年は見あたらず今年になってやっと小さいのが見えてきました。昨年の大きい台風の影響だと思います。

7 まとめ

以上，日頃の観察結果をもとに，次のように決めて操業しています。漁獲するサイズは，タカジでは，底面の直径が約３ cm 以上，クロミナは 1.5cm 以上，アナゴでは５ cm 以上としています（図 10）。漁が少ないときでも，とにかく小さいものは採りません。アナゴは浅めの場所にいることもあり海底で大きさをゆっくり見ることができます。クロミナとタカジは海中で握り具合で判別しますが，船にあげるとやはり小さいのがあるので，船上で選別して小さいものは再放流します。産卵行動をとっていると思われる貝や固まって生息している時は根こそぎ採らないよう，漁獲する種類は集中しないようこころがけています。

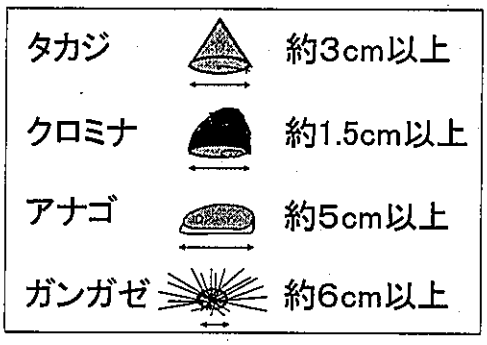

図10　漁獲サイズ

ここ坊津は，自然が豊かで，心が豊かで，伝統が豊かで，私にとって暮らしやすい漁村です。また，この仕事が続けられるのも，坊の海の豊かさのおかげだと思います。漁業は，魅力的で，「これからも続けていきたい！」「もっと海のことが知りたい！」と思っています。

漁業という仕事は，根性が必要で，他の女性誰もができるとは言えませんが，やる気次第ではないかと思います。

考えてみると，私が漁業を続けているのは周囲の人々に支えられているところが大きく，特に，父は，楽しいながらも危険であるこの仕事を勧め，辛抱強く指導し，今も厳しいながら見守ってくれています。父とともに操業できる安心感があるからこそ，漁業を続けているのだと思います。改めて皆さんに感謝いたします。

今後も，この魅力的な坊の海で頑張っていきたいと思います。